

平和の絵、戦いの絵／日高夏希さん

「将来は、メディアを通して平和に貢献したい」そう言って大学に入り、ジャーナリズムを学んできた。その夢を抱いたのは高校時代。平和学習に熱心なミッシヨン・スクールに通い、広島・長崎へも訪れて、原爆の記憶を学んだ。戦争の悲惨さや、世界で苦しんでいる人々の現状を多くの人に伝えたいと思っていた。

今は大学2年、将来を具体的に描いていく時期。だが私は学ぶほどに、自分が何をしたいのか見えなくなり、迷い道にいた。「平和に貢献」するために、何をすれば良いのだろうか。毎朝見るNHKのワールドニュースでは、テロや内戦が報道されるが、ニュースが伝えてもテロはなくなりません。日本は「戦後66年」でも、世界では現在進行形で何百人も死ぬ争いが起きている。世界の「戦後」は未だ来ない。

そして今年3月に起きた、東日本大震災でも、ニュースは悲劇を繰り返し映し伝えた。津波にさらわれる人々の中で、私の親友の命も突然尽きることになった。戦時に生まれたわけではないのに、人はこんなにも簡単に死んでしまうのか。人の生み出した放射能の見えない恐怖。悲しみとともに無力感を抱いていた。

そんな二十歳の夏の終わり、私がした初めての異国への旅。「フクシマの英雄」を皇太子賞で讀えたスペインを訪れ、マドリッド郊外の大学街アルカラ・デ・エナレスに約2週間滞在した。大学主催の文化研修だったため、いわゆる「戦争学習」ではなかったが、平和への夢と向き合える旅となった。そのきっかけとなったのが、マドリッドの美術館でピカソの『ゲルニカ』を見たことだ。

ひんやりした空間に浮かぶ大画面、モノクロームの世界。衝撃の中で逃げ惑う人々の叫び――

私は一時間ほど立ち尽くし、その絵を眺めていた。教科書では見えない筆の跡、作者の息遣い。追い詰められたような強い思いでこの絵が描かれたことを感じた。とりわけ私が目を離せなくなったのは、絵の左端。死んだ我が子を抱いて、自分が死ぬより辛いかのように嘆く母親の姿だ。腕の中で息絶えた子は、苦しみの中でもほんの少し、安心しているように見える。

似た母子像を見たことがある・・・高校の頃訪れた埼玉県・丸木美術館の『原爆の図』を思い出した。広島と同じだ。戦いで傷つくのは、小さな幸せを守って生きていた市民。水墨画とキュビズム、画法はまったく違うが、戦争の痛みが海の向こうでも黒と白で描かれたのだ。どちらの絵も、こめられた怒り、悲しみが色褪せず人々の心を打つ。

ふと気がつくのと、絵の周りには様々な国の人が、私のように足を止めていた。そうだ、ここはスペイン。アメリカ人学生の団体、よく似た中国人の親子。数人の女友達で旅行しているのはドイツ人か。アラブ系の青年、寄り添っているスペイン人のカップル。誰も一心に絵を見ては、何かささやき合っている。老若男女が集っていたが、私と同年代の人が特に多いようだった。私は突然、とても強く思った。彼らと話してみた。この絵を見て何を思うのか、尋ねてみたい。私の全く気づかないこと、考えないことが見つかる気がした。

この衝動に任せて、「皆さん、ちよつと集まって議論してみませんか」と大きな声を出してみようか。しかし、そこまで無謀な行動に出る勇氣とスペイン語力は私にはまだ無かった。監視員の目にも委縮してしまい、何も言えずに次の部屋へ移った。

アルカラに帰る電車の中、私はとても後悔した。何でも無謀に挑戦する勢いが取り柄のはずなのに。一人でも話しかければ良かった。来ようと思えばまた旅行はできるが、二十歳の今、世界の同年代が何を思っているか、とても聞きたかった。海外の人に出会うだけでなく、深く話してみたかった。

ソフィア王妃美術館には他にも、内戦中の写真が展示されていた。兵隊を送る時の白熱した雰囲気は、戦時中の日本に似ていた。イラク戦争を始める時のアメリカ、今北朝鮮で行われる軍事パレードとも。本能のまま走る闘牛のように、力を誇示しながらまっすぐ突き進む・・・

この日をきっかけに私は、今までと少し違う見方で平和を考え始めた。高校までに戦争についてはかなり学んだつもりだった。しかし、政治史や戦争被害を知るだけでは、前に進めないのだと気付いた。

なぜ今も戦争や紛争はなくなるのだろうか。政治家たちには責任があるが、「この世を滅ぼそう」などという悪意を持って国を率いた人はいないのではないのか。支持する国民もその戦いが「正義」だと信じているのではないか。自由や豊かなく暮らしを勝ち取るため、悪政を倒すため、民族の尊厳を守るため・・・人が争う大義は、今もきつと変わらない。人々が戦いの方向へ向かう原因は、日常の中にも眠っているのではないか。

「マドリードは、絵に描いたように美しく、平和だ。しかしスペインも悲劇の歴史を持ち、未来だってどうなるかわからない。私は滞在中、平和な社会に、また自身の中に、いくつかの「戦いの種」となり得る要素を見つけた。それは私が外国人としてこの街に来たからこそ見えるものであり、これから学ぶべきことを示す道標でもあった。

一つ目は、自分の中に雑草のように存在していた「人種差別」。いつの間にか種が飛んで芽を出し、根を張っていた。アルカラではアジア人はめずらしく、見分けがつかないのだから、「チナ、China」とよく声を掛けられた。そんな時、私も友人たちも「ハポネサ、Japonesa!」少しむきになって否定した。ふと思う。もしも私が「フランス人？」なんて間違えられたとしたら、こんな風に拒絶するだろうか。自分の心に「中国人」を低く見ている部分があるのではないか。ニュースで見る中国の「模倣、不正、卑しい」といったイメージ。中国人の友達もいるにも関わらず、国全体のステレオタイプは頑ななものになっていた。

些細な偏見は、ホームステイ先の家族にもあった。スペイン語には、「面倒くさいこと」を指す「Trabajo de China 中国人の仕事」という皮肉な言い回しがある。「中国人はいくらでも働くんだものね」と18歳の長女が教えてくれた。決して彼ら

が嫌味なわけではなく、明るくて気のいい人たちだ。だからこそ無意識のうちに根付く差別は、いつか国同士の大きな溝を生みかねない。

もう一つは、宗教の摩擦だ。中学から聖歌隊に所属していた私は、チャペルという空間が好きで、セゴビアやトレドなど、観光に行く时必须大聖堂をじっくりと見た。美しいステンドグラスを始め、教会には美術館のように絵画や聖像が溢れていた。逆にブラド美術館は、教会のように宗教画で埋め尽くされる。日本ではあまり宗教を身近に感じる機会はなく、ともすれば怪しいと偏見を抱かれがちだ。文化の中にこれほどカトリックが色濃く表れているとは、海外経験のない私には驚きだった。

日曜の礼拝に、ホストファミリーと参加もした。街の教会は満席。誰もがマリア像の裾に触れて跪き、献金し、熱心に祈りを捧げていた。私が日本人だとわかると「苦しむ人たちのために祈っているわ」と手を握ってくれたシスター。それはとても、心安らぐ空間であった。

同時に忘れられないのが、アルカラ駅前に立っていた、マドリード列車爆破テロ事件犠牲者の銅像だ。2004年3月11日に起きたアルカイダによるテロで、200人近くが死亡した。その事件のことを調べると、無実のアメリカ人男性が、ムスリムだ

という理由で疑われた経緯もあったという。意識してニュースをみると、テロは教会やモスク周辺で起きることが多い。神と命を敬って生きるための宗教が、今も平和の障壁になっていることを再認識した。

社会のマイナスイ面を書いてきたようだが、もちろん人々との温かい触れ合いもあった。日本から来たというと、誰もが被災地のことを案じてくれた。市場で相席したオランダ人、シリア人と原子力発電について議論したこともあった。

天災の苦しみや問題を分かち合えるのも、メディアで世界がつながっているから。私は将来やはり「伝える」ことで社会貢献をしたい。もっともっと、世界の人と議論がしたい！高校の頃のように、溢れるような好奇心が湧いていた。

日本での震災だけでなく、世界各国で台風、洪水、地震など、世界では自然災害が相次ぎ、人々が命を失う。逆らえない天災があるのだから、せめて防げる人災はなるべく。神様がこの世界に与える苦しみを分かち合って生きていこう。

差別や摩擦は簡単には消えない。それでも互いを知ることで、もっと言えば互いに興味と憧れを持つことで、戦いの種が育つことは止められるはずだ。偏見や摩擦を作り出すのがメディアならば、関心や憧れを与えるのもメディアだ。異なる人同士が歩み寄り、理解していくきっかけを作りたい。

このエッセイを書く中で、私は旅で感じた様々な衝撃を再び噛み締める。知らない世界を訪れ、人と出会い、感じたことを表現する。この行為が私はとても好きだ。「伝える」という形での社会貢献をしたいと改めて思う。

その第一歩として、毎日新聞の学生記者団体に所属し、「戦争を考える」という記事を書いて丸木美術館や映画「ひろしま」を取材した。原子力のことも交えて、読者を深く考えさせる記事を掲載できたと思う。これからは、革新的な国際交流活動をしている学生などのことも取り上げ、日本の若者を刺激したいと思っている。

『ゲルニカ』の中で、死んだ兵士が握る花は、平和への希望と言われる。ただ美しいだけではないと私は思う。花は種を作り、また芽を出して増え、贈り物になる。今の世で、国と国を繋ぐもの・・・それは情報、そして旅だ。市民の心に「異なる人」への尊敬を根付かせ、平和を築く贈り物が、観光とメディアなのではないか。発信する人間になるためには、世界を知って、自分なりの深い見解を持たなくてはいけない。平和を描く人間になるために、ピースボートに私は、絶対に乗りたいたい。